

勝林寺寺報

ストレスといふこと

今日の日本の社会では、しばしば親が自分の子供を虐待するという、おぞましい事件がおきております。かつての時代には考えられなかつたことですが、時には、我が子を殺すといふこともあります。なぜそんなことになるのでしょうか。その原因の多くは、ストレスによるといわれております。

ストレスとは、何かの原因によって、精神が不安定の状態におちいり、心が極度に緊張することをいいます。そしてそのストレスには、はげしい不安におわれるというようなタイプと、怒りの感情が急に高まるというようなタイプと、深い絶望感におちいるというようなタイプがあります。その不安のタイプとは、自分の事情がうまくいかないとか、人間関係のトラブルなどによる、心の緊張状態をいいます。また怒りのタイプとは、さまざまの人間との交流の中で、腹の立つことがあっても、それを我慢していることによって生まれてくる、心の緊張をいいます。そして絶望感のタイプとは、人との別離など、何かの喪失体験による心の緊張状態をいいます。いずれも自分自身における、深い心の傷、心の痛みのことです。

そこで、そのようなストレスは、いかにして解決するかということですが、それについては、その問題となつた状態を解消するという方法があります。たとえば、悩んでいた人間関係のトラブルがうまく解決するとか、借金地獄から抜け出すことです。しかしながら、人生の問題は、

そなううまく解消するとはかぎりません。その場合には、自分自身の生き方をかえるほかあります。

それについて、第一には、酒を飲んですべてを忘れるか、スポーツや旅行などによつて、気を紛らわす方法があります。しかしこれは、一時的なごまかしにすぎません。そこで第二には、よい先輩や友人をもつて、その人に自分の悩み、心の痛みをなんでも語ることができ、その人がいろいろいろと助言を受けることです。私たちは、そういうよい先輩、友人を持つことがたいせつです。

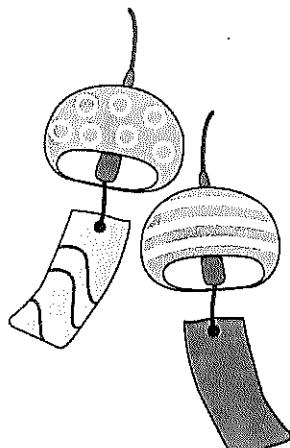
第三

として第三には、何よりも正しい先人の足跡をたどり、その教えをわが身に付けることによつて、自分自身の人格全体を、しっかりと育てていくことがあります。どんな苦しみにも、悲しみにも、それによく耐え、それをよく乗り越えていくことのできる、自分自身に成熟していくことです。

仏法、真宗とは、あらゆるストレスを、よく解決し、それをこえていくことのできる、まことに、自立した人間を育ててくれる教えです。
(信楽峻磨遺稿法語集より引用)

葬儀
七月二八日

出石 古田敬治様 八十八歳



ご案内

全戦没者追悼法要

先の大戦で亡くなつた勝林寺の全ご門徒の追悼法要を今年もお勤めさせていただきます。世界のあちこちから、悲惨な争いのニュースが聞こえます。日本では、戦争を知らない世代が圧倒的多数を占めて戦争の悲惨さが伝わりにくくなりました。この法要を機に、平和の意味について皆で考えたいものです。

日時 平成二十九年八月八日(火)

午後一時三〇分より

一一日(土)

出石B盆

一一日(金)

出石A盆

永井正子宅 初盆

中村ゆかり宅 七回忌

玉井妙子宅 初盆

平野孝幸宅 七回忌

一四日(月)

渋谷厚志宅 納骨法要

一五日(火)

奥地糸夫宅 七・三三回忌

一九日(土)

勝林寺 子ども会

二二日(水)

地蔵盆

二六日(水)

みのりを聞く会

二七日(日)

永井あさ江宅 納骨法要

三一日(木)

数森 修宅 一周忌

三二日(木)

出石但東仏教会 研修旅行

五日(土) 湯口孝司宅 初盆

六日(日) 山田 稔宅 初盆 一周忌

八日(火) 勝林寺 戦没者追悼法要

一一日(金) 出石A盆

一一日(金) 出石B盆

一一日(金) 中村ゆかり宅 七回忌

一一日(金) 玉井妙子宅 初盆

一一日(金) 平野孝幸宅 七回忌

一一日(金) 一九日(土) 出石C盆

一一日(金) 二二日(水) 地蔵盆

一一日(金) 二六日(水) みのりを聞く会

一一日(金) 二七日(日) 永井あさ江宅 納骨法要

一一日(金) 三一日(木) 数森 修宅 一周忌

一一日(金) 三二日(木) 出石但東仏教会 研修旅行

一一日(金) (敬称略)

八月 勝林寺 予定



内容 学習 工作
川遊びなど
美術館見学
昼食は、恒例のそうめん流し
参加費 一人五〇〇円(兄弟割引あり)
申込 地区仏婦評議員さん
または、直接、勝林寺に申し込んでください。

願わざるに草は生え

願えども 花は散る
願わざるに 草は生え

春の草は取つても抜いてもあとからあとからしづとく生え出でます。

心がけを改め、自分と戦つてきた毎日ではありますましたが、人が悪いのか社会が悪いのか自分が至らぬためなのか、依然この歳になるまで欲の草は次々とはびこります。人を蹴落としてもという根性は、すたりませんしぐちも」ぼれま

願わざるに 草は生え
願えども 花は散る

修行に励んでみたり、道徳に努めてみたり、

心の雑草とたたかつてきましたつもりの私ですのに・・・。年が寄らないように、年をとつても楽に死ねるよう、薫にもする思いで神仏にご加護を願つてもみました。しかし、「願えども花は散る。」

しかし、どうでしよう。生える草、どうしてみようもない煩惱を、そのまま引き受けてくださる、大きな力があるとしたら。いすれば散らねばならないこの花を、散る花として、そのままおさめ取つてくださいる広いめぐみがあつたどちら。

如来様は、春のあたたかな陽の光のようです。「シャーリップッタよ、お前何ゆえにこの如来をアミダと名付けたまわるのか」「シャーリップッタよ、この如来様のお光りは、十方世界のどんなもののどんな障害をも、そのままで、ひとたび取りて長く捨てぬ如来様だから、阿弥陀と名付けたまわるのである」お釈迦様は「阿弥陀經」に、そのようにお説きくださっています。

(前住職 「テレホン法話第一集」より引用)

金剛心は菩提心

一心すがむわち 他力なり

かつて「法話で、「美しい月に見とれているところには、ただ月があるだけです」と聞かせていただきました。なるほど。確かにそうです。月に見とれていると言ひながら、そこで自分のところの状態がどうだとか、見ている姿勢がどうだとか気にするのは、月を見ているふりをして、自分の姿を確認しているだけでしょう。

今月のご和讃を全て示せば、次の通りです。
信心すなはち一心なり 一心すなはち金剛心
金剛心は菩提心 この心すなはち他力なり

(『註釈版聖典』五八一頁)

「われにまかせよ、必ず救う」という勅命を受け入れたがう心を「信心」といい、さらに「信樂」ともいいます。ですから、信心といつても、何か別にこころをつくり上げるというのではなく、ただ阿弥陀さまのおおせを、疑いなく聞いているという状態(信樂)があるだけですから、信心とは、信樂の「一心」だとされています。それで、その信心とは、ダイヤモンドのように決して壊れないこころである

は「菩提心」であるとも言われています。菩提心とは、自分のみならず、他者をも一人のこらへ、安樂なる涅槃の領域へ導かんとする、仏道を歩む者に必須の志です。

この如来様は、春のあたたかな陽の光のようです。「シャーリップッタよ、お前何ゆえにこの如来をアミダと名付けたまわるのか」「シャーリップッタよ、この如来様のお光りは、十方世界のどんなもののどんな障害をも、そのままひどい病気を取りて長く捨てぬ如来様だから、阿弥陀と名付けたまわるのである」お釈迦様は「阿弥陀經」に、そのようにお説きくださっています。

(前住職 「テレホン法話第一集」より引用)

「菩提心」とか言われましてもね。どうをどう探しても、ひっくり返して振つてみても、そんなこころがどこにあるようには思えません。どうです。自慢じゃありませんが、私たちには、そんなこころはひとつかけらもありません。だから親鸞聖人は、私たちのこころを当てにせず、阿弥陀さまを当てにしなさいと言われるのです。

阿弥陀さまによつて、浄土に生まれさせていただく時」という信心は、人間からはいくら考えても出ではきません。このこころは、阿弥陀さまが万徳を込めて呼びかけられる南無阿弥陀仏の名号からしか起こり得ないのです。だから「この心すなはち他力なり」と最後に讀えられていくのです。このご和讃は、この最後の一局がとても大切です。

阿弥陀さまの金剛心といわれる眞実心や、一人ひとりを見抜いて必ず万人を救うと言われた大菩提心が、名号となつて私たちのこころに響きこんでくる時、不確かな私のこころに、確かに阿弥陀さまの智慧と慈悲とが信心となつて宿ります。私たちは自分のこころの有様を気にするのではなく、夜空に美しく輝く月がこころをやさしく満たしていくように、広大なる阿弥陀さまの慈悲をただただ仰ぎ続けて、その光の中に生きていきます。

今月のご和讃を、もう一度味わつてみてください。

どすん

お寺の坊守さんで組織する会を「寺族婦人会」といいます。出石組には、現在一七名の会員さんがおられ、研修会を開いたり、奉仕団など組の行事を行つたりする」ともあります。その

事をお世話したり、美味しいものを食べに行つたりする」ともあります。その

修会を開いたり、奉仕団など組の行

活動のひとつに「ダーナ活動」があります。勝林寺の婦人会と同じように、現在の会の基を築き、運営し、支えてきてくださった先輩の方々

に感謝の気持ちを伝える活動です。先日副会長の専福寺の坊守さんと一緒に、すでに引退され

た前坊守様が「健在のお寺をささやかなプレゼントをもつて、訪問させていただきました。前

坊守様と言つても、まだまだお元気で、法務を支えておられる方もありますし、中には、体調を崩されて直接お会いすることはかなわない方

もおられます。そんな中で、あるご家族の方が、

「母は、『もう、皆さんは私のことは忘れておら

れるだろうね』と寂しそうにいうことがあります。今日のことを伝えたら、きっと喜びます」

とおしゃつてくださいました。本当にささやか

な活動ですし、喜んでいただけることを期待し

ているものでもありませんが、この時ばかりは

「来てよかつた」と、二人して心底うれしい

気持ちになりました。

いつも思います。うれしい気持ちも楽しい気

持ちも、その気持ちの数だけうれしさ楽しさが

あると。誰かのうれしさや楽しさと比べてのう

れしさ楽しさではないと。そして、うれしさは、

例えれば、プレゼントした人とされた人では、一

般的には、された人のうれしさが大きいよう

思われるがちですが、そうではなく、プレゼント

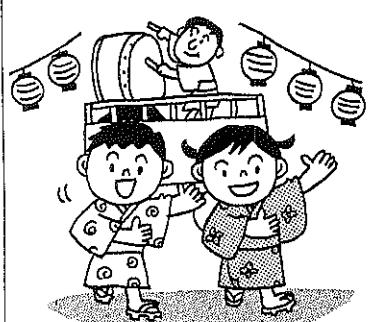
を喜んでもらえた時のうれしさは、された人に

勝るとも劣らないものであると。

あの日の訪問で感じた前坊守さんの近況は、

折に触れて一人でも多くの方に伝え、皆でずつ

と大切にしていこうと思います。(文責 坊守)



井上 見淳(いのうえ けんじゅん)